

ゴールボール教室開催に 向けた講習会

講師

信太 奈美 先生

健康福祉学部 理学療法学科 准教授
／ボランティアセンターアドバイザー

2021年12月10日（土）

報告

視覚障がいの方の感じている世界を知る

来年1月16日（日）と2月13日（日）に公益財団法人東京都スポーツ文化事業団と東京都立大が協力して開催するゴールボール教室に向けて、健康福祉学部准教授の信太先生にお越しいただき、視覚障がいの方への接し方やゴールボール競技の基本を学ぶ講習会を実施しました。

まずは、視覚障がいがある方への声のかけ方やガイドの方法などを学びました。声掛けの工夫やガイドの際、自分の腕や肩に手を添えていただくこと、クロックポジションでの伝え方など、どうしたら相手に分かりやすく伝わるか、相手を不安にさせないかなど、実践しながら教えていただきました。その後、サウンドテーブルテニスの公認球であるプラサウンドボールを使い、2人1組で、お互いに目を瞑ってボールを転がしながらパスを合いました。音を頼りにパスし合うのは頭で考えているよりも難しく、お互いに何回も挑戦しました。

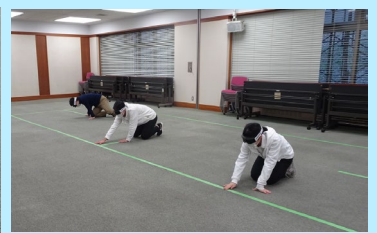
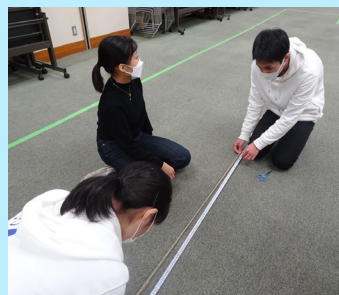
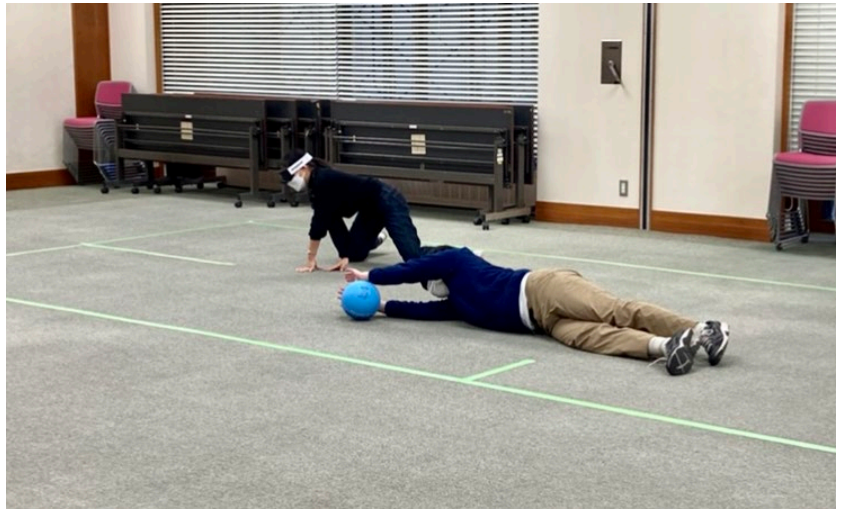


▲アイシェードを装着

少し慣れてきたところでアイシェードをつけました。「本当に何も見えない！」という言葉が出ていましたが、普段自分が感じている世界との違いを知り、そして競技で行っている選手の感覚の凄さを知る機会となりました。

まずは、コートを作ってみよう

ゴールボール教室当日にはコート作成の準備があります。コート内のライン作成のためには、床との間に紐を通してその上からテープを貼ります。競技を行う選手は、床の凸凹の感触を頼りに自分の位置を確認しています。今回は当日のコートの3分の1を作ることにしました。紐はどのくらいの太さだったら凸凹感が分かるのか、コート作成にどのくらいの時間を要するのかなど、教室の運営を想定しながら作成していきました。



▲ラインを探して位置を確認

ゴールボールの動きを察知する

コートを作成したあとは交替でゴールボールを投げたり、受け止めたりしました。手の感触でラインを知り、鈴の音を頼りにボールがどこに向かって来ているのかを知るはかなり難しかったです。それだけに、ボールを受け止められた時の嬉しさも大きかったです。実際の競技ではボールを投げる速度もかなり早かったり、フェイントによる心理戦が繰り広げられたりするとこのことで、ゴールボール競技はかなり奥が深いということも、今日の講習では理解しました。

教室開催に向けて

今日の講習でゴールボール競技の楽しさや奥深さを知る入口に立てたように思います。この実感を忘れず、教室運営の際はどんなことに気をつけたらいいか、設営にどのくらいの時間が必要か、どうしたら安全で楽しい教室になるか等、しっかり考えて取り組みたいと思います。

プログラムメンバーの声（一部）

・ゴールボールに初めて触れ、基本的な事は理解できたと思う。何も見えず、真っ暗だと恐怖感を抱きやすいと思うので、その恐怖感を和らげ、楽しんでもらえるように、積極的にコミュニケーションを取ってきたい。

・普段の生活でどれだけ視覚に頼っているか身にしみて感じた。視覚が遮断されるだけで恐怖感を感じるが、ゴールボールはスポーツ競技であり、怪我などの危険も隣り合わせである。そのため、ゴールボール教室当日は、参加者の皆さんをはじめボランティアスタッフの方々全員が安全に活動に取り組めるよう全体を見て行動したい。その上で、今回感じた競技の楽しさ・面白さを皆さんにも体験してもらえるような空間作りに励みたい。